

田和山の本質

副会長 堀 眺

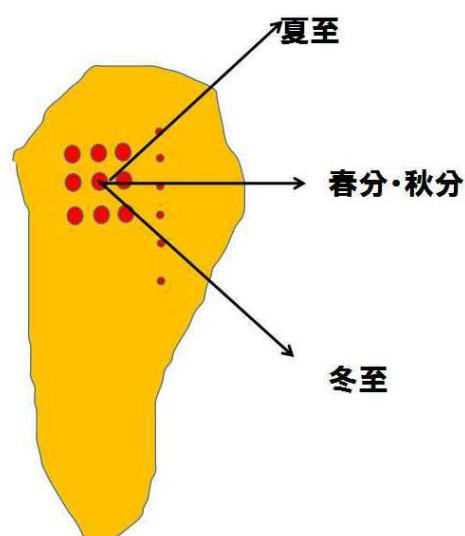
「山陰随一のパワースポット」という文章を掲載していますが、本当は日本随一と書くべきところ、出雲人の奥ゆかしさがついこのような控えめな表現になってしまいました。

そこでは卑弥呼を 400 年遡る占い師「マダム田和山」がいたのではないかという、なかなか楽しい推測を述べています。古代においてはあらゆる行動が占い、あるいは神意でもって規制されていたことはよく知られています。ギリシアのデルフォイの神託、中国殷時代の亀甲占いなど。わが日本も弥生時代には鹿の肩甲骨を穿って焼きを入れ、ひび割れで占いをしていたことが、卜骨と呼ばれる実際の遺物で知られています。



弥生時代は水田農業の時代ですから、季節や農作業の時期を決定するのも重要な占い師の役割だったことでしょう。そのことは田和山遺跡頂上部の遺構でも明らかになっています。

田和山の頂上には九本柱の高床建築がありました。その東側に 6 本の柱が立っていたと考えられます。その柱は、九本柱の中心の位置から見通しますと、



中央の柱は茶臼山、大山の頂上を指し、ちょうど春分、秋分の日には太陽が出てくる位置に当たります。また北側の柱は夏至の日の出、南側の柱は冬至の日の出の方位を示していると考えられます。つまり、カレンダーや農業暦を定める重要な役割を果たしたのではないかと推測されるのです。

400年後の卑弥呼の「鬼道」の中にも、このような農業暦を定め布告するといった役割があったに相違ないのです。こう考えてきますと、日本古代史の最大の謎とされる卑弥呼の宮殿や邪馬台国を考えるうえで、田和山が最大のヒントになるのは自明のことです。邪馬台国畿内説が有力視され、箸墓が卑弥呼の墓ではないかなどと述べる考古学者が多いそうです。魏志には卑弥呼の墓は径百歩の円墳であったと記されているのに、勝手に長さ百歩の前方後円墳に読み替えて平気にいるのですから、神経がわかりません。

田和山は当時の中心的集落のあった意宇の地からは離れた、忌部川と宍道湖に挟まれた湿地帯にあり、いわば隠れ里だったと思われます。そのような場所に召使数十人とひっそりと住んでいたのでしょう。

卑弥呼も召使千人に囲まれ、しかもその姿を見た人はなかったというのですから、町から離れた山奥に秘密の宮殿を営んでいたのでしょう。墓もその近くに作られたでしょうから、人里離れた場所の円墳がヒントになると考えられます。倭国は當時は九州を指す言葉ですから、きっと筑紫の何処かということになるのではないのでしょうか？